

根岸庵を訪う記

寺田寅彦

青空文庫

九月五日動物園の大蛇を見に行くとして京橋の寓居ぐうきよを出て通り
合わせの鉄道馬車に乗り上野へ着いたのが二時頃。今日は曇天で
暑さも薄く道も悪くないのでなかなか公園も賑にぎおうている。西郷
の銅像の後ろから黒門くろもんの前へぬけて動物園の方へ曲ると外国の
水兵が人力じんりきと何か八釜やかましく云つて直ねぶみをしていたが話が纏まとま
らなかつたと見えて間もなく商品陳列所の方へ行つてしまった。
マニラの帰休兵とかで茶色の制服に中折帽を冠かぶつたのがここばかり
でない途中でも沢山たくさん見受けた。動物園は休みと見えて門が締
まつているようであつたから博物館の方へそれて杉林の中へ這入はい
つた。鞞ぶらんこに四、五人子供が集まつて騒いでいる。ふり返つて

見ると動物園の門に田舎者らしい老人と小僧と見えるのが立つて掛札を見ている。其処そこへ美術学校の方から車が二台ほろ幌をかけたのが出て来たがこれもそこへ止つて何か云うている様子であつたがやがてまた勸工場かんこうばの方へ引いて行つた。自分も陳列所前の砂道を横切つて向いの杉林に這入るとパノラマ館の前でやつている楽隊が面白そうに聞えたからつい其方そちらへ足が向いたが丁度その前まで行くと一切り済んだのであろうぴたりと止めてしまつて楽手は煙草などふかしてじろく見物の顔を見ている。後ろへ廻つて見ると小さな杉が十本くらいある下に石の観音がころがつている。何々大姉だいしと刻してある。真逆まさかに墓表ぼひょうとは見えずまた墓地でもないので見るとなんでもこれは其処そこで情夫に殺された女か何かの供

養に立てたのではあるまいかなど 凄涼な感に打たれて其処を
 去り、館の裏手へ廻ると坂の上に三十くらいの女と十歳くらいの
 女の子とが枯枝を拾うていたからこれに上根岸までの道を聞い
 たら丁寧ていねいに教えてくれた。不折ふせつの油画あぶらえにありそうな女だなど
 考えながら博物館の横手 大猷院尊前だいゆういんそんぜんと刻した石燈籠の並んだ
 処を通つて行くと下り坂になつた。道端に乞食が一人しやがんで
 頻りに叩頭しきぬかずしていたが誰れも慈善家でないと見えて鏝びたいちもん一文も奉
 捨にならなかつたのは気の毒であつた。これが柴とりの云うた新
 坂なるべし。つくつくほうしつが八釜やかましいまで鳴いているが車の音の聞
 えぬのは有難いと思うていると上野から出て来た列車が煤煙を吐
 いて通つて行つた。三番と掛札した踏切を越えると桜木町で辻に

交番所がある。帽子を取つて恭しくうやうや子規しきの家を尋ねたが知らぬとの答故ゆえ少々意外に思つて顔を見詰めた。するとこれが案外親切な
巡査で戸籍簿のようなものを引つくり返して小首を傾けながら見
ておつたが後を見かえつて内に昼ねしていた今一人のを呼び起し
た。交代の時間が来たからと云つて序ついでにこの人にも尋ねてくれた
がこれも知らぬ。この巡査の少々横柄おうへい顔が癩がにさおわつたれども
前のが親切に對しました恭しく礼を述べて左へ曲つた。何でも上根
岸八十二番とか思つていたが家々の門札に氣を付けて見て行くう
ち前田の邸やしきと云うに行ゆき当あたつたので漱石師そうせきしに聞いた事を思い出
して裏へ廻ると小さな小路こうじで角に鶯うぐいす横よこ町ちやうと札が打つてある。
これを這入つて黒板塀と竹藪の狭い間を二十間けんばかり行くと左側

に正岡常規つねのりとかなり新しい門札がある。黒い冠木門かぶきもんの両開き戸をあけるとすぐ玄関で案内を乞うと右脇にある台所で何かしていた老母らしきが出て来た。姓名を告げて漱石師より予て紹介かねのあつた筈はずである事など述べた。玄関にある下駄が皆女物で子規のらしいのが見えぬのが先ず胸にこたえた。外出と云う事は夢の外ないであろう。枕まくら上がみのしきを隔てて座を与えられた。初対面の挨拶もすんであたりを見廻した。四畳半と覚しき間まの中央に床をのべて糸のように痩せ細った身体を横たえて時々咳せきが出ると枕上の白木の箱の蓋を取っては吐き込んでいる。蒼白くて頬の落ちた顔に力なけれど一片の烈火瞳底に燃えているように思われる。左側に机があつて俳書らしいものが積んである。机に倚よる事さえ

叶かなわぬのであろうか。右脇には句集など取散らして原稿紙に何か書きかけていた様子である。いちばん目に止るのは足の方の鴨居かまいに笠と簀とを吊して笠には「西方十萬億土順礼 西子」と書いてある。右側の障子の外が『ホトトギス』へ掲げた小園で奥行四間もあろうか萩の本もとを束ねたのが数株心のままに茂っているが花はまだついておらぬ。まいかいは花が落ちてうてながまだ残ったままである。白粉花おしろいばなばかりは咲き残っていたが鶏頭けいとうは障子にかくれて丁度見えなかつた。熊本の近況から漱石師の噂になつて昔話も出た。師は学生の頃は至かけんつて寡言な温順な人で学校なども至つて欠席が少なかつたが子規は俳句分類に取りかかつてから欠席ばかりしていたそうだ。師と子規と親密になつたのは知り合つて

から四年もたつて後であつたが懇意になるとずいぶん子供らしく
議論なんかして時々喧嘩けんかなどもする。そう云う風であるから自然
細さいくん君といさかう事もあるそうだ。それを予め知つておらぬと細
君も驚く事があるかも知れぬが根が氣安過ぎるからの事である故
驚く事はない。いったい誰れに対してもあたりの良い人の不平の
漏らし所は家庭だなど云う。室へやの庭に向いた方の鴨居に水彩画が
一葉隣室に油画が一枚掛つている。皆不折が書いたので水彩の方
は富士の六合目で磊らいらい々たる赭土塊あかつちくれを踏んで向うへ行く人物も
ある。油画は御茶の水の写生、あまり名画とは見えぬようである。
不折ほど熱心な画家はない。もう今日の洋画家中唯一の浅井忠氏ちゆう
を除けばいずれも根性の卑劣なほうしつ嫉しつの強い女のような奴ばかり

で、浅井氏が今度洋行するととなると誰れもその後任を引受ける人がない。ないではないが浅井の洋行が厭いやであるから邪魔をしようとするのである。驚いたものだ。不折の如きも近来評判がよいので彼等の妬ねたみを買ひ既に今度仏国博覧会へ出品する積つもりの作も審査官の黒田等が仕様もあろうに零点をつけて不合格にしてしまつたそうだ。こう云う風であるから真面目に熱心しどろに斯道しどろの研究をしようと云う考えはなく少しく名が出れば肖像でも画こういて黄白こうはくを貪むさぼろうと云うさもししい奴ばかりで、中にたまたま不折のような熱心家はあるが貧乏であるから思うように研究が出来ぬ。そこらの車夫でもモデルに雇うとなると一日五十銭も取る。少し若い女などになるとどうしても一円は取られる。それでなかなか時間もか

かるから研究と一口に云うても容易な事ではない。景色画でもそうだ。先頃上州じょうしゅうへ写生に行つて二十日ほど雨のふる日も休まずに画いて歸つて来ると浅井氏がもう一週間行つて直して来いと云われたからまた行つて来てようよう出来上がったと云つていたそうさ。それでもとにかく熱心がひどいからあまり器用なたちでもなくまだ未熟ではあるが成効するだろうよ。やはり『ホトトギス』の裏絵をかく為山いざんと云う男があるがこの男は不折とまるで反対な性で趣味も新奇な洋風のを好む。いったい手先は不折なんかとちがつてよほど器用だがどうも不勉強であるから近来は少々な折に先を越されそうさ。それがちと近来不平のようであるがそれかと云うてやはり不精だから仕方がない。あのくらいの天才を抱

きながら終つひに不折の熱心に勝を譲るかも知れぬなど話しているうち上野からの汽車が隣の植込の向うをぐんぐんと通った。隣の庭の折戸の上に鳥からすが三羽下りてガーくくとなく。夕日が畳の半分ほど這入つて来た。不折の一番得意で他に及ぶ者のないのは『日本』に連載するような意匠画でこれこそ他に類がない。配合の巧みな事材料の豊富なのに驚いてしまう。例えば犬百題など云う難題でも何処どこかから材料を引っぱり出して来て苦もなく拵こしらえる。いたい無学と云つてよい男であるからこれはきつと僕等がいろんな入智恵をするのだと思う人があるようだが中々そんな事ではない。僕等が夢にも知らぬような事が沢山あつて一々説明を聞いてようやく合点がてんが行くくらいである。どうも奇態な男だ。先達せんだつて『日

本』新聞に掲げた古瓦の画などは最も得意でまた実際真似は出来ぬ。あの瓦の形を近頃秀真ほすまと云う美術学校の人が鑄物いものにして茶ちやた托くにこしらえた。そいつが出来損なつたのを僕が貰うてあるから見せようとて見せてくれた。十五枚の内ようよう五枚出来たところで、それも穴だらけに出来て中に破れて繕つくろつたのもあるが、それが却かえつて一段の趣味を増しているようだと云うたら子規も同意した。巧みに古色が付けてあるからどうしても数百年前のものしか見えぬ。中に蝸かたつむり牛を這わして「角つのふりわけよ」の句が刻してあるのなどはずいぶん面白い。絵とちがつて鑄物だから蝸牛が大変よく利いているとか云うて不折もよほど気に入った様子だった。羽織を質入れしてもぜひ捲えさせると云うていたそうだと。

話し半ば^{なか}へ老母が珈琲^{コーヒー}を酌^{しやく}んで来る。子規には牛乳を持って来た。汽車がまた通つて ^{つくつくほうし} の声を打消していった。初対面からちと厚^{あつかま}顔^{かほ}しいようではあつたが自分は生来絵が好きで^{かね}予てよい不折の絵が別けても好きであつたから^{ついで}序^{ついで}があつたら何でもよ^いから一枚呉^くれまいかと頼んで下さいと云つたら快く引受けてくれたのは嬉しかった。子規も小さい時分から絵画は非常に好きだが自分は一向かけないのが残念でたまらぬと^{かこ}唧^{かこ}つていた。夕日はますます傾いた。隣の屋敷で琴が聞える。音楽は好きかと聞くと勿論きらいではないが悲しいかな音楽の事は少しも知らぬ。どうか調べてみたいと思うけれどもこれからでは到底駄目であろう。^{もつと}尤もこの頃人の話で^{おおよそ}大凡^{おおよそ}こんなものかくらいは解つたようだが

元来西洋の音楽などは遠くの昔バイオリンを聞いたばかりでピアノなんか一度も聞いた事はないからなおさら駄目だ。どうかしてあんなものが聞けるようにも一度なりたいと思うけれどもそれも駄目だと云うて暫く黙した。自分は何と云うてよいか判らなかつた。黯然^{あんぜん}として吾も黙^{われ}した。また汽車が来た。色々議論もあるようであるが日本の音楽も今のままでは到底見込^{みこみ}がないそうだ。国が箱庭的であるからか音楽まで箱庭的である。一度音楽学校の音楽室で琴の演奏を聞いたが遠くで琴が聞えるくらいの事で物にならぬ。やはり天井の低い狭い室でなければ引合わぬと見える。それに調子が単純で弾ずる人に熱情がないからなおさらいかん。自分は素人^{しろうとかんが}考^{かんが}えて何でも楽器は指の先で弾くものだから女に

適したものとばかり思っていたが中々そんな浅いものではない。

日本人が西洋の楽器を取つてならず事はならずが音楽にならぬと

云うのはつまり弾手ひきての情が単調で狂すると云う事がないからで、

西洋の名手とまで行かぬ人でも樂がくの大切な面白い所へくると一切

夢中になつてしまふそうだ。こればかりは日本人の真似の出来ぬ

事で致し方がない。ことに婦人は駄目だ、冷淡で熱情がないから。

露伴ろはんの妹などは一時評判であつたがやはり駄目だと云う事だ。空

が曇つたのか日が上野の山へかくれたか疊の夕日が消えてしまひ

つくつくほうしの声が沈んだようになった。鳥はいつの間にか飛

んで行つていた。また出ますと云うたら宿は何処どこかと聞いたから

一両日中に谷中やなかの禪寺へ籠る事を話して暇いとまを告げて門へ出た。隣

の琴の音が急になつて胸をかき乱さるるような気がする。不知しらずし識ら其方へと路次を這はい入ると道はいよいよ狭くなつて井戸が道をさえぎっている。その傍で若い女が米を磨といでいる。流しの板のすべりそうなのを踏んで向側へ越すと柵があつてその上は鉄道線路、その向うは山の裾である。其処を右へ曲るとよう／＼広い街に出たから浅草の方へと足を運んだ。琴の音はやはりついて来る。道がまた狭くなつてもとの前田邸の裏へ出た。ここから元来た道を交番所の前まであるいてここから曲らずに真直ぐに行くとまた踏切を越えねばならぬ。琴の音はもうついて来ぬ。森の中でつくつくほうしがゆるやかに鳴いて、日陰だから人が蝙蝠傘こうもりがさを阿弥陀りようにさしてゆる／＼あるく。山の上には人が沢たくさん山停車場から凌

雲うんかく閣かくの方を眺めている。左側の柵の中で子供が四、五人石炭車に乗ったり押ししたりしている。機関車がすさまじい音をして小家の向うを出て来た。浅草へ行く積りであつたがせつかく根岸で味おうた清閑の情を軽かるわざ業わざの太鼓御賽銭おさいせんの音に汚けがすが厭になつたから山下まで来ると急いで鉄道馬車に飛乗つて京橋まで窮屈な目にあつて、向うに坐つた金縁眼鏡きんぷちめがね隣に坐つた禿頭の行商と欠あ伸くびの掛け合いで歸つて来たら大通りの時計台が六時を打つた。

(明治三十二年九月)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

根岸庵を訪う記

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>